主体的な学びを育む ギャップターム
―キャリアにつながる学外での学びを考える―

岩瀬 峰代
島根大学教育・学生支援本部
大学教育センター准教授

はじめに

キャリアをつなぐ力、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な能力が示されており（中央教育審議会答申2011）、その育成は大学教育においても重要な課題である。大学教育では、学生が自らの視野を広げ、進路を具体化し、それまでに育成した社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を専門分野の学修を通して伸長・深化させていく段階とされる。そのため、専門分野において学修を深めるとともに、自分で考えて判断して行動する（社会環境の変化に対応できる）能力の育成に寄与する、学外における学生主体の教育プログラムや正課外活動に参加することはとても重要であると考えられている。

島根大学（以下、本学）では、2016年度よりキャリア教育の教育内容を充実させるために低学年が履修可能な共通教養科目および各学部の専門教育において体験学修科目を開講している。この科目群は「過疎・高齢化、離島・中山間地域問題、地域医療危機などの問題を抱える地域社会の現状を理解し、それらを解決するための力を培う」ことのできる内容となっている。

加えて学生たちがこのようなキャリア教育関連の科目を受講しやすくするとともに、海外留学、海外研修、インターンシップ、ボランティア活動などへ積極的に参加、あるいは自ら企画して主体的に活動できるよう2019年よりギャップターム（フレックスタームを含む）を設けた。これらの取り組みによって学生の経験値を高め、学ぶ意欲を育むことを目指している。

本稿では低学年に提供する体験学修科目を通じて学生が獲得した能力、意識の変化の評価結果およびギャッ

プタームの仕組みやギャップタームに活動する目的などの調査結果を示す。さらに学生のキャリアの事例をもとに主体的に学外で学修することは、卒業後のキャリアにどのような影響を及ぼすのかについて考察する。

1 低学年における体験学修科目

低学年における体験学修科目群は地域社会の現状を理解し、それらを解決するための力を培うことを目標としている。そのため、実際に体験し、知識と結びつけることで、どのように学びを深め、キャリアにつなげていくのかについて学生自身が考えられるように工夫して実施されている。これらの科目は教養育成科目や各学部で開講している科目を合わせると現在45科目となっている[表1]。これらの科目群は正課、正課外の両方を含み、島根県内の広範囲の地域にある企業や医療施設、教育施設、福祉施設、建築現場、農場などの各専門分野と関連した現場で学べることが特徴になっている[図1]。

区分	科目数
教養育成科目	9
法文学部	10
教育学部	5
人間科学部	1
医学部	3
総合理工学部	2
生物資源科学部	15
合計	45

[表1]各学部等の体験学修科目群

[図1]体験学修のフィールド

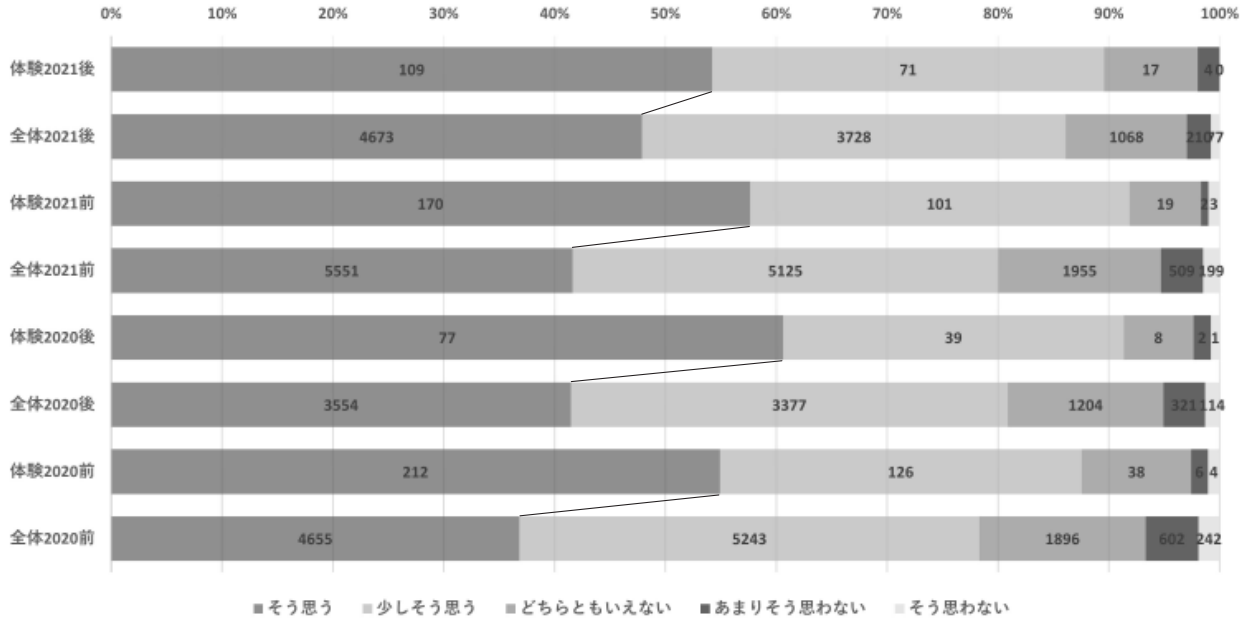
この科目群の特性がどのような教育的効果を生み出しているのかについて検証する目的で全学的に実施している授業評価アンケートにおいて、受講後の変化に関する質問項目を設定し、体験学修科目群のうちの正課授業について受講生の回答を分析した。

コロナ禍の影響もあり、年度によって差はあるが、体験学修科目の受講生の回答と体験学修科目を含む全ての科目の受講生を比較すると、２０２０年度の前期、後期、２０２１年度の前期、後期のいずれにおいても体験学修科目の受講生は「授業内容について他の科目の学習内容など、本授業以外との関連性を考えることができる」あるいは「授業で学習したことを本授業以外においても応用することができる」ことを強く意識していることが明らかになった[図２・３]。この傾向はコロナ禍前の２０１７年度前期、２０１８年度前期においても同様に示されており（島根大学ＨＰ）、体験学修科目の特徴的な教育効果と考えられる。

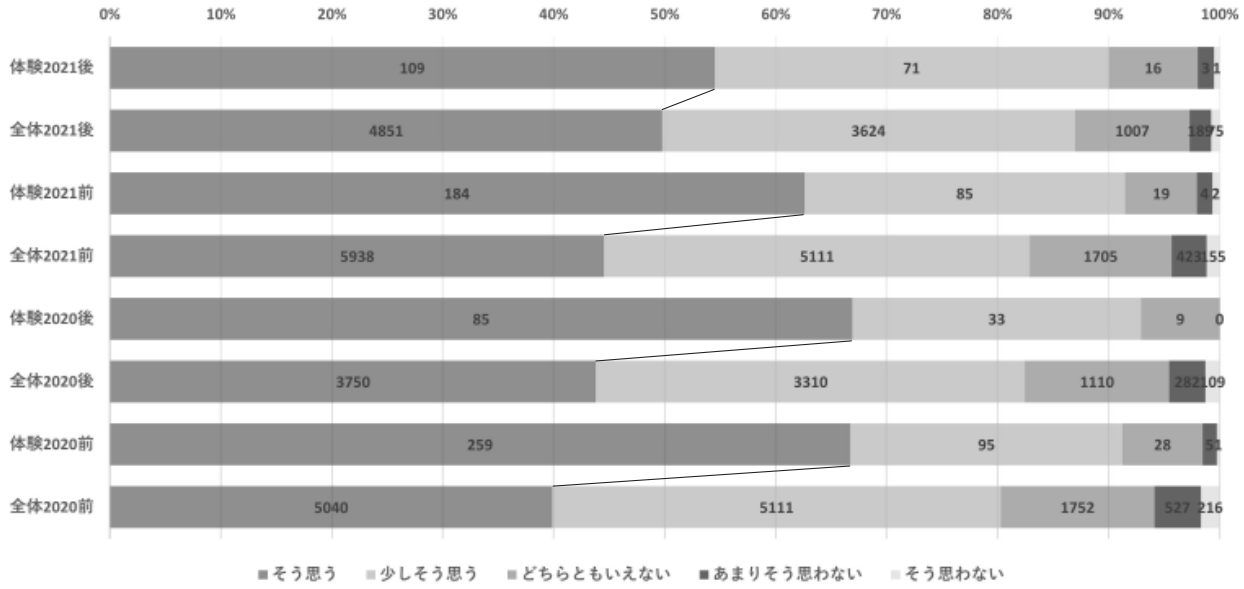
さらに体験学修科目を受講した受講生のみへの「本授業での授業方法は、適切なものであった」かに対して、90％以上は受講した授業内容を理解し、そのために体験を通して学ぶことが相応しいと実感していた[図４]。「現実の問題と自らの専門分野の学びを関連付けることができた」あるいは「自分の専門分野以外の様々な分野も学びたいと考えるようになった」受講生は80％を超えていた[図５・６]。このことは体験学修科目を受講することで、学生自身が学んでいる知識・スキルが現実の課題解決のために重要であることを理解し、そのためさらに学びを深めたいという動機付けにつながっていることを示している。一方で「本授業での授業方法は、様々な科目で行われるのが望ましい」は25％前後に留まっていた[図７]。これにより、科目によってふさわしい教授法があることを学生も理解していることがうかがえた。

このように授業評価アンケートの分析から体験学修科目群がキャリア教育としての教育効果があること示されたため、多くの学生がこのような教育プログラムに参加しやすくする、あるいは自ら企画して主体的に活動しやすくするための期間を設けることになった。

er Education

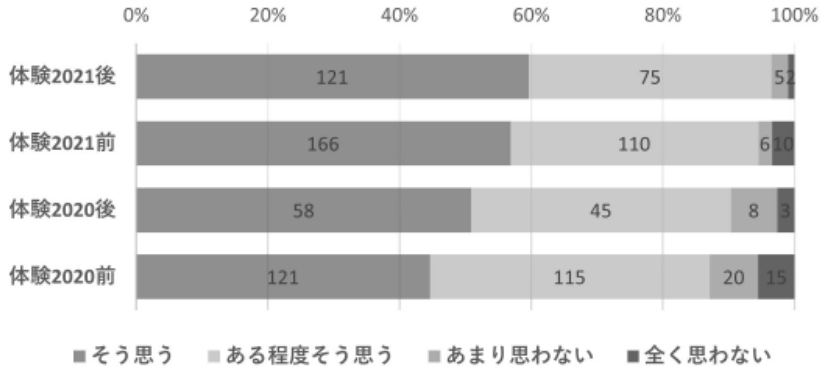


［図２］授業内容について他の科目の学習内容など、本授業以外との関連性を考えることができる

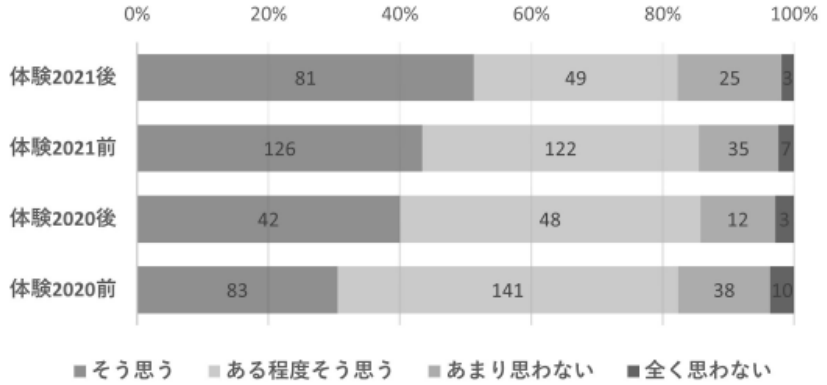


［図３］授業で学習したことを本授業以外においても応用することができる

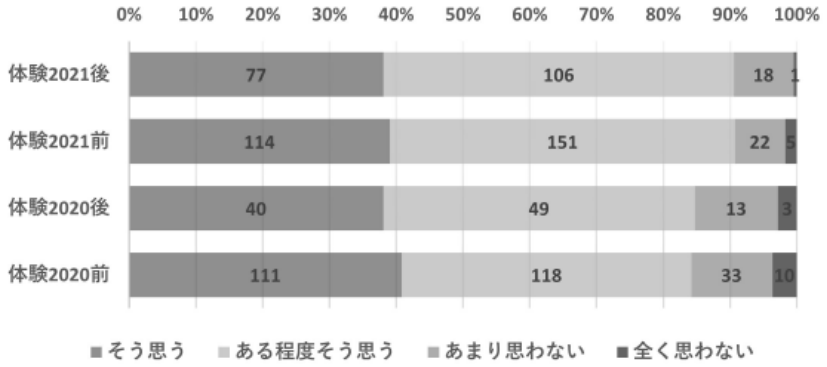
* 数字は回答数、体験 2021(2020) 後 or 前＝ 2021(2020) 年度後期、前期に体験学修科目に対する受講生の回答、全体 2021(2020) 後 or 前＝ 2021(2020) 年度後期、前期に体験学修科目を含む全体の科目に対する受講生の回答



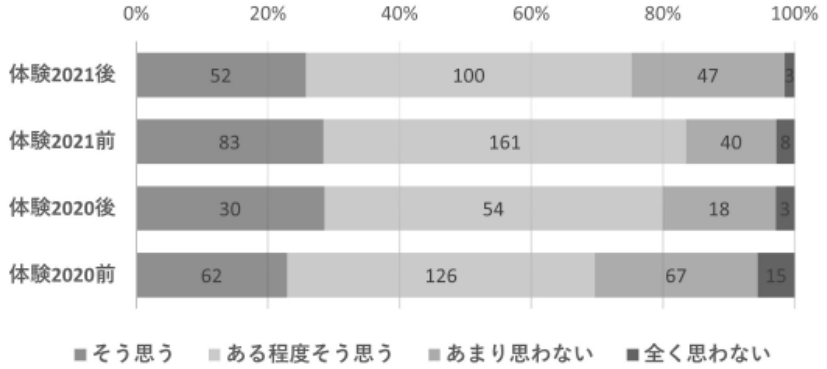
[図4]本授業での授業方法は、適切なものであった



[図5]本授業を通して、現実の問題と自らの専門分野の学びを関連付けることができた



[図6]本授業を通して、自分の専門分野以外の様々な分野も学びたいと考えるようになった



[図7]本授業での授業方法は、様々な科目で行われるのが望ましい

2 島根大学のフレックスターム&ギャップターム

その期間がフレックスターム&ギャップタームである。これは前期の授業期間終了後の約4週間をフレックスタームとして設け、フレックスタームと夏季休業期間を合わせてギャップタームとして、学生が体験学修や海外留学、海外研修、インターンシップ、ボランティア活動などに積極的に参加できる期間を確保しようというものである。学生は学部生の間に少なくとも1回はギャップタームを利用して自主的な活動することが推奨されている。そのため大学提供の教育プログラムやインターンシップなどが一覧できるカレンダーをホームページ上に掲示する工夫も行って

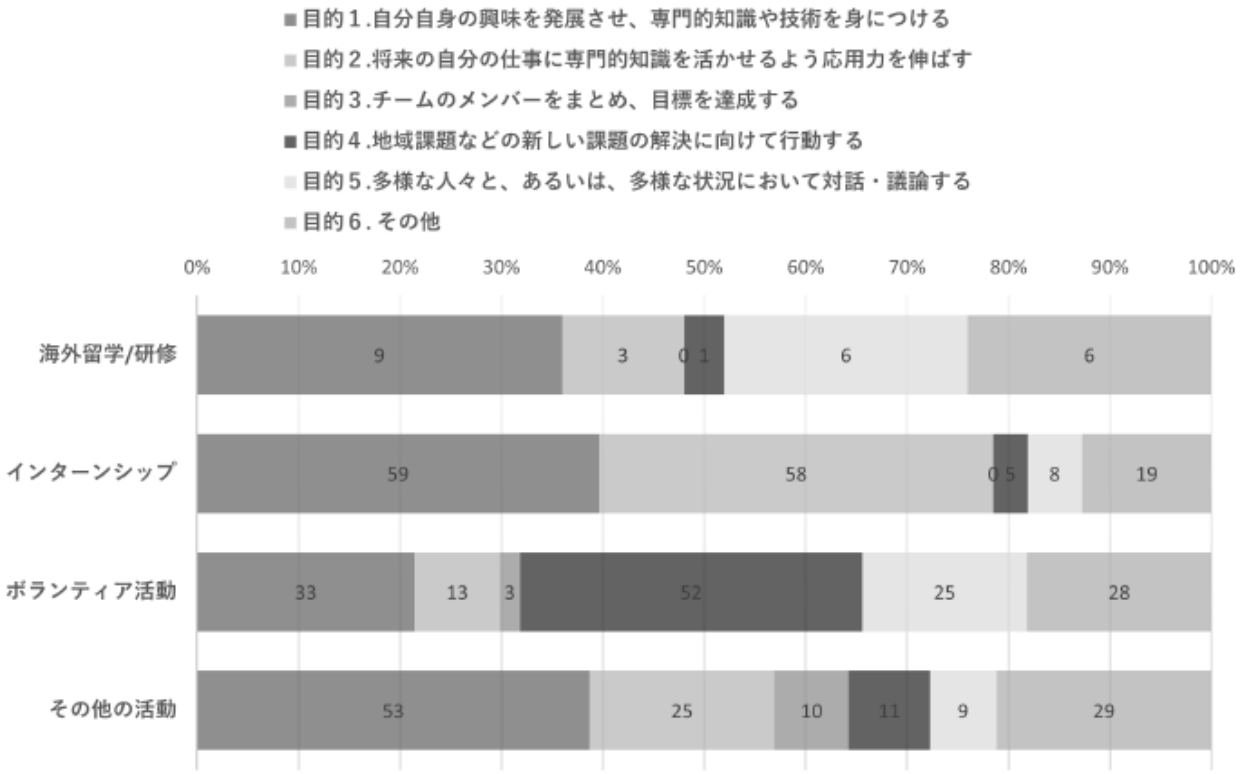
いる。

この1、2年はコロナ禍で海外留学、研修が困難な状況ではあるが、学生の希望を確認する意味でも今年度はギャップターム中の計画を立てているかどうか、どのような目的で活動を行おうと考えているかについて全学生にアンケート調査を行った(回収1361名:1年生39%、2年生25%、3年生17%、4年生18%、その他1%)。ただし、今年度はコロナ禍により前期授業開始が遅れたため、フレックスタームは設けていない。したがって、〔ギャップターム〕=〔夏季休業期間〕となる。

その結果、学生自身が独自に情報を探して実施する活動、あるいは独自に企画して実施する活動については、海外留学/研修は2%に留まったが、インターンシップ、ボランティア活動、その他の活動それぞれ10%程度の学生が参加

	海外留学 / 研修	インターンシップ	ボランティア活動	その他の活動
参加する(参加率)	25 (2%)	149 (11%)	154(11%)	137(10%)
今年は参加しない	1336	1212	1207	1224
総計	1361	1361	1361	1361

[表2]学生自身が独自に実施する活動参加者数(名)



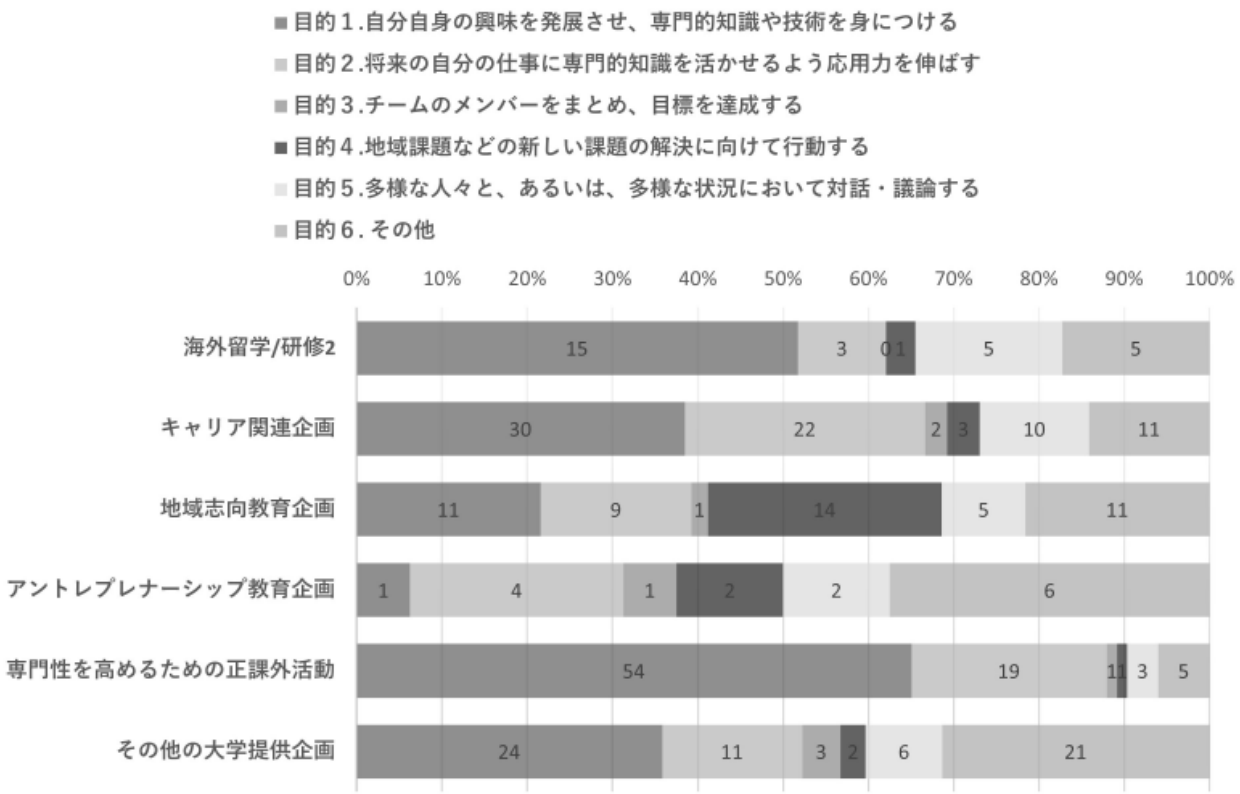
[図8]学生自身が独自に実施する活動動機

を企画していた[表2]。その目的として「自分自身の興味を発展させ、専門的知識や技術を身につける」あるいは「将来の自分の仕事に専門的知識を活かせるよう応用力を伸ばすこと」を挙げており、キャリアを意識して自ら活動しようとしている学生が多いことがわかった[図8]。

ギャップターム中に大学が提供する企画(教育プログラム)への参加を予定している学生もそれぞれ1~7%となっていた[表3]。参加動機は「自分自身の興味を発展させ、専門的知識や技術を身につける」が多かったが、企画に応じて参加者の目的は多様であることが示されており[図9]、学生が多様な学びを受け取るためには大学側が企画を提供する必要性があると考えら

	海外留学/研修	キャリア関連企画	地域志向教育企画	アントレプレナーシップ教育企画	専門性を高めるための正課外活動	その他の大学提供企画
参加する(参加率)	29 (2%)	78 (6%)	51 (4%)	16 (1%)	93 (7%)	67 (5%)
今年は参加しない	1332	1283	1310	1345	1268	1294
総計	1361	1361	1361	1361	1361	1361

[表3]大学が提供する企画への参加者数(名)



[図9]大学が提供する企画への参加動機

Career Educ

れた。

なお、大学が提供する企画はギャップターム以外の期間にも実施されているが、それらの参加予定者は本アンケートには含まれていない。

3 学外での学修の意義と今後の展望

学外で学修することの重要性は低学年における体験学修科目受講生の授業評価アンケートから明らかになった。学生たちはこれらの体験学修科目の受講を踏まえ、ギャップタームにおいて主体的な学修を実践しようとしていることがうかがえる。また、自主的な活動において大きな学びがあったことも2019年当時のインタビューでも明らかである（https://www.shimane-u.ac.jp/education/school_info/flex_term/）。

しかしながら、2020年度以降はコロナ禍によりフレックスタームを設定できなかったことや渡航が困難になったことが原因で、学生が思い通りに活動できていない状況が続いている。また、この制度が始まってからの卒業生が多くないことから、現在のところ、卒業後のキャリアにどのような影響を及ぼすのかについて正確に評価することは難しい。しかし、学部生の海外留学経験がキャリアにインパクトを与えることがいくつかの文献で報告されており、本学の取り組みが卒業後の主体的なキャリア選択にポジティブな影響を与えている可能性は高い。

今後は、これまでの成果をもとに教育プログラムの改善を行うとともに、ギャップタームに学生が活動しやすい方法を提示しながら、安全に自主的な学修を深められるようさらに支援をしていきたいと考えている。